



闇長姫

モノローグボイスドラマ

静かな夜に包まれた、どこかの海沿いの街で。

それは灯籠流しの夜のことだった。

先祖の霊を弔（とむら）うため、海へと送り出されたいくつもの灯籠。それらは遠い陸をはなれ、あかあかとした灯（ひ）を照らしながら、黒い海の波間を静かに揺れていた。

風ひとつない穏やかな海。

突然、海の底から、たくさんの魚の群れが現れる。

その黒い魚群は、ひとつひとつがまるでシャチのように大きく、水面にヒレを叩きつけ、大きなしぶきをあげ、波間に揺れる灯籠を、我先にと食べ尽くしていく。

その向こう、まだ水面（すいめん）の乱れていない海の中から、とりわけ大きな魚が、風をきり、波をかきわけながら浮上してくる。

それは獲物を見つけた鯨のように、黒い体で波をきり、すさまじい速さで近づいてくる。その背中には、手毬のような浮き球を抱えた、振袖姿の少女が佇んでいた。

闇長姫。

それはいしにえの頃より、魂が終わりを迎えるとき、地底湖の底から姿を現すという。彼女はその腕の中に、手毬ほどもある、青く光る陶器の浮き球を大事そうに抱えていた。

黒い魚群が、まるで海面を暴れるように灯籠を食べ尽くしていく。魚に飲み込まれた灯籠は、一瞬その中で光を放ったかとおもうと、そのままふわっと、彼女が持つ浮き球の中へ、次から次へと吸い込まれていくのだった。

命は、最後に光を放つ。

太古の頃より、彼女はそうやって、その光る浮き球の中に、魂を集めてきた。そして気の遠くなるほど長い年月の間、それらを守り、やがてあるべき場所へとおくこと。それが彼女の役目だった。

桔梗（ききょう）色の袖から覗く小さな腕を、彼女はすっと空へと掲げると、指でくるり、と小さく円をかく。

すると、水面を暴れる魚たちは群れをなし、その円に従うように大きな玉を作ると、

また深く、海の底と潜っていく。

魂を集め、役目を果たし終えた闇長姫。

ゆつくりと目を閉じ、たくさんの魂の炎で満たされたその浮き球を、愛おしむように、そっと両手で抱きしめる。

だがそのとき、彼女は後ろからやってきた漁船に気付かず、船に頭をこん、とぶつけてしまう。

闇長姫はそのまま意識をなくし、ぶくぶくと海の中へ沈んでしまう。両手に抱えていたその浮き球は、船にぶつかったはずみで僅かにひび割れ、そのまま闇長姫の手を離れ、ぶかぶかと夜の海を漂いながら、すぐ近くの防波堤へと流されていった。

穏やかな夜の海に浮かぶ、小さな防波堤。

その隅っこに座り、一人で海を眺める少女、ゆい。

灯籠流しのお祭りを見たあと、ゆいはこの場所で一人、ゆっくりと沖へ流れていく、いくつもの灯籠を、膝を抱えてずっと眺めていた。

そろそろ家に帰ろうと思った矢先。自分のすぐ足元の波打ち際に、何かぶかぶかと浮かいているものがあるのに気づく。ゆいは、防波堤のブロックの隙間を慎重に降りていくと、それを拾い上げる。

それはまるで、すずしげな金魚鉢の入れ物に飾るような、陶器でできた大きな浮き球だった。表面に少し欠けた小さなひび割れがある。

ゆいは顔を近づけ、ひび割れた小さな穴から、その中の様子を覗いてみる。浮き球の中には、真っ暗な闇の中に幾つもの炎が漂っていた。それは無数の生き物の形をとり、万華鏡のように絶えず変化していく。まるで宇宙のはじまりのように熱く、目が焼けてしまいそうなほど、強い力に満ち溢れていた。

ゆいはその浮き球がとても気に入り、拾い上げると、そのまま背中を向け、おかあさんの待つ家へと、駆け出していく。

闇長姫はその一部始終を、ただ海の中から、じっと見つめていた。

彼女は気絶した後、海の底でやっと意識をとり戻し、自らの手を離れた浮き球を探しに、この港の近くまでやって来ていたのだ。

水面から、少しだけ出した顔が、ゆいの姿をとらえる。防波堤を走るゆいの後を追うようにして、闇長姫は波間をちゃぷちゃぷと進んでいく。

ゆいの持つその浮き球を見ると、闇長姫思わず目を疑った。

ゆいの手の中で浮き球が揺れることに、その欠けた穴からは、たくさん魂が外に漏れ出しているのだ。

それらは外に出たかと思うと、瞬く間に、大昔のサメの祖先や、ノコギリのような歯をもった、恐ろしい魚竜などに姿を変え、黒い大きな影となって、悠々と夜の街を泳いでいくのだった。ゆいはそれに気づきもせず、うれしそうに浮き球を抱えながら、家へと続く路地へと曲がっていく。

大変なことになってしまった。浮き玉を取り戻すため、闇長姫はこれまで自分が一度も踏み入れたことがなかった、陸の世界へと、恐る恐る一步を踏み出す。

海の世界とは違う、慣れない自分自身の体に、よたよたと足をふらつかせながら。ゆいが進んでいった、裏路地へと入る。その先に広がるのは、どこまでも続く大きなコンクリートの建物。はじめて見る、人間の都会の街だった。

あたりは群青色（ぐんじょういろ）の夜に包まれ、そこに人の姿はなく、ゆいの持つ浮き球から漏れだしたのであろう、色々な太古の海の生き物が、そこら中にはびこっていた。

自動販売機にたむろする、ウミユリの群集。後ろから、闇長姫の袖をかすめて通りすぎる、三葉虫やオウムガイ。カンブリア記に海を制したであろう、名もなきあらゆる生き物たち。

突然、ふっと辺りが暗闇に包まれる。身構えると、頭上の空に、鋭いアゴをもった魚竜の影が姿を現す。

闇長姫はあわてて、道の片隅にあったゴミ箱の中に身を隠す。

我ながら、なんともなさない姿だ。光の浮き球さえあれば、こんな魚など、かんとんに私の手の内に従えてやるのに。

頭上を悠々を泳ぐ、巨大な魚の影におびえながら。光の浮き球を追って、闇長姫は、夜の街を進んでいく。



ゆいはようやく、住んでいる団地へと帰ってきた。

駆け足で上の階へと昇る。

ドアの隙間から、明かりがさしている。お母さんが仕事から帰ってきているのだ。

「ゆい、おかえり。灯籠流し見に行ってたの？」

お母さんの問いに、ゆいはただ、こくりとうなずく。

ゆいはある事情から、言葉を自由に発することができない少女だった。

そしてさつき防波堤で拾った浮き球をお母さんに見せると、すこし得意げな笑顔をみせる。

「海で拾ったの？ 欠けているから、手を怪我しないように気をつけてね」

いつかお母さんにも、この浮き球の中に広がる、

不思議な生き物の世界のことを教えてあげようと、ゆいはそう思った。

深夜。六畳間の一室で、おかあさんと眠りにつくゆい。

ゆいは布団から顔を出し、畳の上に置いてある、さつき拾ってきた浮き球を見つめる。

それは時々、柔らかな光で、暗い部屋の中をぼうっと照らし、見たことのない不思議な生き物の影を見せるのだ。

布団の中で、わくわくしながらその様子を見てみると、

一匹の小さな魚の影が映る。

その魚は、浮き球の小さな割れ目から、ぴよんと外に出たかと思うと、

そのままふらふらと泳いで、

玄関の扉の隙間から、団地の外の廊下へと泳いでいった。

ゆいは眠っている母親を起こさないようにそっと布団から出ると、その光る浮き球を抱えて、

小さな魚を追いかけようと、そっと団地の外へと飛び出していく。

※

団地の前までたどり着く間長姫。

上へと続く吹き抜けを見上げる。

どうやら上の階から、生き物の影が広がってきているようだった。

階段を上（のぼ）ると、やがて生き物の影の中に、海の恐竜のようなものが泳ぎ始め、続いて、イルカやシャチが姿を現す。

それはまるで、生命の進化を辿っているかのようなだった。

階段を登りきると、

廊下の向こうから、小さな魚が、ゆらゆらと自分のもとに泳いでくる。

それは夕べ、沖で灯籠の魂を集めるのを手伝ってくれた魚だった。

間長姫が力を失ったことで、ずいぶん小さくなってしまっていたが、自分のことを覚えていたのか、近づいてきてくれたことが、なにより嬉しかった。

そして廊下の向こうから。

浮き球を抱えて走ってきた、ゆいの姿が。

間長姫は、大切な物を持っていったゆいのことを、ひどく叱りつけてやろうと思った。

だがゆいは、小さな魚を操る間長姫を見ると、

嬉しそうにそばへとかけ寄り、

目を光らせて、彼女の手を、ぎゅっと握りしめるのであった。

どうやらゆいは、友達になりたいと思ったらしく、

嬉しそうにはしゃぐゆいを前に、間長姫はゆいを叱ることもできず、持っている浮き球を、取り上げる機会もなくしてしまう。

喋ることのできないゆいと、生まれながら言葉を持たない間長姫。

ゆいは間長姫の手を引いて、魚の影が漂う、廊下の先へと進んでいく。海の生き物で彩られた団地と一緒に見て回ろう、そう言いたいのだろう。

だがゆいは、廊下の途中で転び、持っていた光の浮き球を手放してしまう。
浮き球は、そのまま階段を転がっていったかと思うと、パリン、という音が下から聞こえる。

浮き球は、大きなひび割れを作り、階段の踊り場で止まっていた。
どうしていいかわからず、あわてて浮き球を拾いあげようとする、ゆい。

だが閻長姫は、その浮き球の影に、何か黒いものがうごめいていることに気付く。
その黒い影は、すっと縦に伸びたかと思うと、背広を着た男の姿へと変わっていく。

背広の男の影は、目の前にいるゆいを見下ろす。

「ゆい：何をしている　こっちに来るんだ」

ゆいは、その姿に見覚えがあった。

それは、かつて自分のおかあさんと喧嘩をして出て行った、おとうさんの姿をしていた。

そして父親の影はゆいの腕を掴むと、
そのままゆいを連れ去り、どこかへと消えてしまう。

閻長姫は、その影を追って、団地の外に出る。

外には、黒い霧のようなもやが、道を漂っていた。

ゆいを連れ去った父親が、そこを通っていた証だ。

それは海のほうへと続いており、急いで後を追う閻長姫。

いつしか辺りは、真っ暗なもやに包まれ、雷雨が吹き荒れる嵐の夜へと変わっていった。

風が吹きすさぶ、嵐の海。

ゆいは、父親の影に手を引かれて、あの防波堤にいた。

父親はゆいの腕を掴んだまま、防波堤の先の、高波が押し寄せる海の中へ、
なぜかゆいを引きずりこもうとしていた。

必死に抵抗するゆい。閻長姫はゆいを助けようと、父親に近づく。

突然、父親の背中から、見たこともない大きな魚の化け物が姿を現す。

それは閻長姫のほうを睨みつけ、袖ごと腕を食いちぎろうとピラニアのように襲いかかる。

閻長姫は、自らを龍の姿に変え、

雷鳴が轟く空へと昇り、魚の化け物を迎え撃つ。

黒い嵐を切り裂く、二体の影。

戦いの果てに、閻長姫はとうとう魚の化け物を打ち倒す。

魚の化け物は、そのまま黒い霧となって散り、残ったわずかな一部が、そのまま海へと沈んでいく。

次第に嵐は収まり、黒いもやは晴れ、穏やかな夜の海が戻ってくる。

※

防波堤の上。そこには力付き、冷たいコンクリートの上に倒れる父親の姿があった。

父親は、苦しそうにもがきながら、必死にゆいのほうに手をのばす。

「ゆい：…　波に飲み込まれたらどうする…」

「そこは危険だ　はやく…お父さんのもとにくるんだ…」

繰り返し言葉を訴えながら、手をのばす父親の姿。

ゆいは、その姿をよく覚えていた。

それは、2年前の嵐の夜。

ゆいが言葉を話すことができなくなった、きっかけとなる出来事だった。



2年前の嵐の夜。

母親と二人で暮らしていた団地に、もう長いこと会っていなかった父親が、突然、背広姿で訪ねてきた。

父親は母親に、封筒に入ったわずかばかりの慰謝料と、ある書類を提示する。

それは、父親のゆいの育児権を証明する書類だった。数年前にゆいの母親と離婚し、行方もわからなくなっていた父親が、ゆいを自分のもとに連れ戻すため、何らかの強引な手を使って手に入れたものだ。

父親は、ゆいの手を引く。部屋の中で、ただ立ち尽くす母親を置き去りにし、団地を後にすると、ゆいを車に乗せようとする。

だがゆいは嫌がり、嵐の夜へと一人飛び出し、港のほうに逃げてしまう。

いつもの遊び場だった港には、黒い波が押し寄せていた。

その防波堤の先で、突然強い風が吹き荒れ、

ゆいはコンクリートのブロックにつかまったまま、身動きがとれなくなってしまった。父親はゆいを呼び戻そうと、必死に手をのばす。

「ゆい、波に飲み込まれたらどうする！」

「そこは危険だ！ さあ お父さんのもとにくるんだ…」

高波が防波堤を飲み込む。父親はゆいをかばい、そのまま引き潮にのまれ、黒い海の彼方へと流されてしまう。

荒れ狂う、真っ黒な海。沖の彼方へと消えていく父親の姿。

ゆいはただ地面に座りこみ、ただ茫然とそれを見ていることしかできなかった。

その日の深夜。

たった一人の娘を失い、キッチンでうなだれる母親。きい、と玄関のドアが開く。そこにはずぶぬれで、一人で部屋まで帰ってきたゆいの姿が。

「ゆい、一体どうしたの！ お父さんは…?」

母親に抱かれるゆい。だが、その様子はおかしかった。

ゆいはただ、口をバクバクと動かすだけで、その口元からは空気だけが空しく漏れていく。

ゆいはもう、何も喋ることができなくなっていた。

ゆいはクレヨンをとり、震える手で一枚の絵を書く。

それはぐちゃぐちゃな絵だったが、

真っ黒な嵐の海にさらわれて、遠くへ行ってしまう父親の姿のように見えた。

母親は、ただ黙ってその絵を受け取り、再びゆいを抱きしめる。

もうそれ以上何も、ゆいに問いたすことはできなかった。

※

防波堤のコンクリートに倒れたまま、ただ、ゆいのほうへ必死に手をのばす父親。目の前に、怯えたゆいの姿が見える。

ぼやけた視界の隅に、何かが映る。

それは、見たこともない振袖の少女だった。

いや——俺はこの子を知っている。

2年前の嵐の夜。

突然目の前が真っ暗になり、冷たい水の中で意識がまどろんでいく。

どれだけ時間が経ったのだろうか。

光も届かない、真っ暗な海の底で。

この子——閻長姫を見た。

気が付くと俺は、まるで生まれる以前にそこにいたかのような、暖かな浮き球の中で、ずっと夢を見ていた。

ゆいが生まれてすぐ、

妻と3人で暮らしていた、幸せだった頃のことを。

その後、何かの歯車がかみ合わなくなり。

互いの行き違いから、当たり前だと思っていた幸せが音をたてて崩れ始めたことを。

記憶をたどるようにして、何度も思い返す。

もう少しだけ、自分が妻の苦しみを受け止めてやれば。

俺たちは、これほど苦しまずに済んだんじゃないのか。

3人で、ずっと幸せに暮らしていったんじゃないのか。

※

防波堤のコンクリートの上で。

肩を震わせ、立ち上がることもできない父親の姿。

その傍に身をかがめ、父親の肩にそつと手をおく、閻長姫。

「ゆいを、黒い海に連れて行つてはいけない。一緒に帰ろう。」

ゆいには、彼女が父親にそう語り掛けた気がした。

閻長姫は、茫然とゆいが持っていた、光の浮き球をそつと受け取る。

中の魂は、殆どが空になっており、表面には大きなヒビが入っていた。

ゆいは、はつとした様子で、泣きながら何度も頭を下げる。

大切なものを壊し、取返しのつかないことをしてしまったことを、必死に謝ろうとしているのだ。

閻長姫はゆいを宥（なだ）め、そして静かに、受け取った浮き球を両手で空にかざす。

すると、それまで街中を泳ぎ回っていた、あらゆる生き物の影が、

閻長姫の頭上で大きな渦を描（えが）き、

次々に、彼女の持つ光の浮き球の中へと吸い込まれていく。

浮き球は再び魂で満たされ、豊かな輝きを取り戻していく。

その表面には、ひび割れた線をなぞるように、金色の美しい模様が、徐々に現れていく。

それは、欠けてしまった陶芸を修復する、金繋ぎの技術のように、

壊れた浮き球を、より一層輝かせる力強さを放っていた。

幾千もの生き物の魂が、ゆい達の回りを囲み、大きな渦を描いていく。

父親はただ黙って、その渦の中へと飲み込まれ、消えていく。

その表情は、とても穏やかに見えた。

父親の口元が、かすかに動く。

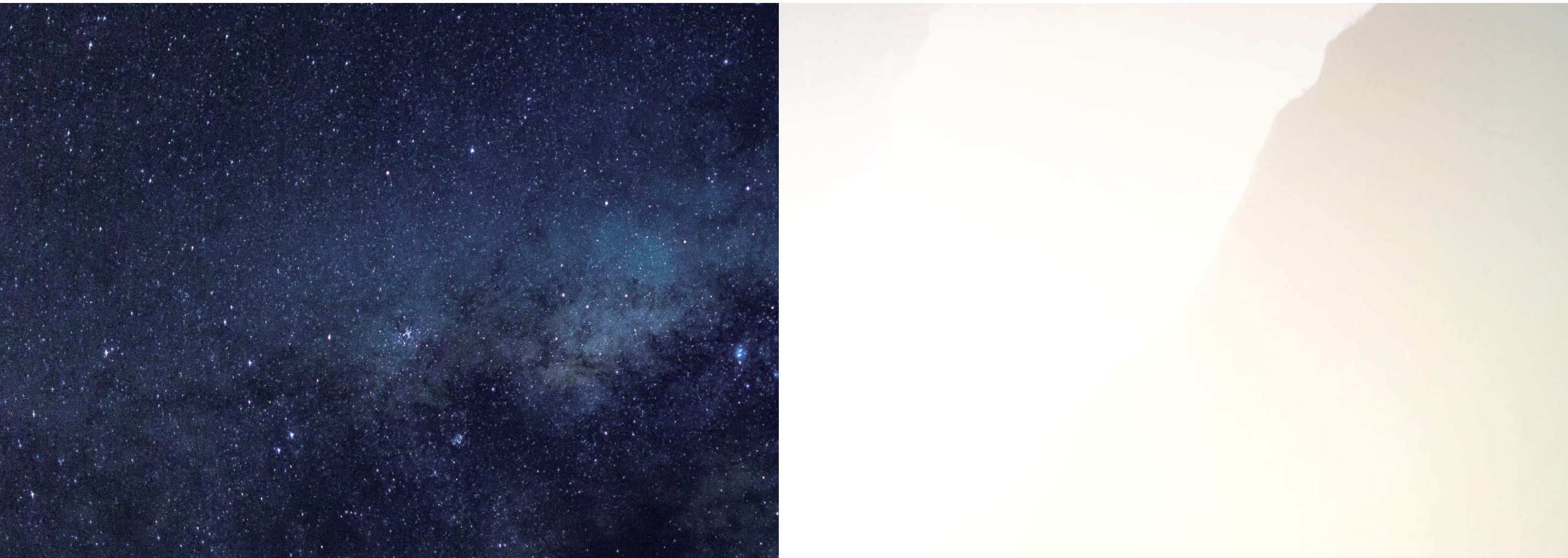
その声は、渦に飲み込まれてしまいそうなほど小さかったが、

ゆいはその言葉を、しっかりと聞き取ることができた。

涙でゆいの視界がぼやける。

涙をぬぐうと、気付いたらもう、そこには誰の姿もなく、

防波堤から見下ろす、いつもの穏やかな夜の海が、そこには広がっていた。



元の姿を取り戻した、静かな夜の街。
団地へと続くコンクリートの道を、とぼと歩いてゆい。

団地の入り口には、お母さんが、息をきらしていた。
どうやら、部屋にゆいがいないことに気づき、外を探しに出ていたらしい。

「ゆい、一体どこに行っていたの！」

お母さんは、ゆいを抱きしめる。

「…お…かあ…さん」

ゆいの口から、かすかに声が漏れる。

それはとてもか細く、消えてしまいそうな声だったが、
確かに、ゆいの口から発せられた声だった。

ゆいはその夜、つたない言葉で、
時間をかけて、お母さんに色々なことを伝えた。

2年前の夜のこと。

今日、防波堤でお父さんと会ったこと。

私達のことを愛している、と。
お父さんは、確かにそう言っていたこと。

※

その夜。ゆいとお母さんは、二人で小さな手作りの灯籠を作り、
一緒に防波堤のほとりから流すと、海の向こうへいるお父さんへと、二人で手を
合わせた。

ゆいは知っている。

私も、お母さんも、みんないつかは、終わりの時がやって来るのだ。
そうしたらまたお父さんや、
あの不思議な女の子と、会えるときが来るのだろうか。

お父さんへの祈りを込めた灯籠は、
そのままゆらゆらと沖のほうへ進み、遠くの波間へと、やがて見えなくなっていっ
た。

おしまい

[illegible]

<http://free-images.gataq.net>

ID:201202132000 ID:201208050000

ID:201101120100 ID:201503251800

